

浄土

十一月号



法然上人鑽仰会

昭和十年五月廿日 第三種郵便物認可(毎月一回一日発行)
昭和二十四年四月二十八日 運輸省(特別扱承認第三五二号)
昭和四十四年十月二十五日印刷 昭和四十四年十一月一日発行

第三十五卷

第十一号

目次

表紙「菊」松寿達文画

バーミヤンのみ仏たち……………(2)

斗病体験記 三つの言葉……………丹羽勝子(7)

法然上人二十五霊場をめぐりて④……………村上博了(12)

シルクロードとコーカサスへの旅日記⑥……………佐藤治子(16)



十二因縁⑪ 先世の宿業(生)……………渋谷賢応(21)

病棟の憂鬱―人間ドックの記……………安居香山(24)

ハガキでひとこと 学生昔と今……………(28)

ひとくち伝記⑫ 庶民の寺定義如来……………高橋良和(30)

11月



今月のことは

秋は深まってゆく。葉一枚一枚落ちてゆき梢の方に熟した柿が美しく夕日に映えていた。日本の秋の風情は、なんともいえない情緒がある。

天高く馬肥ゆる秋、スポーツに、行楽に、また食欲に、人びとはたのしみの多い季節であるが、ただ単に、自然をもとめて外に出かけても、行く途中でくたくたになつて疲労だけが残つたのでは、余り効果がない。小さな庭先きの落葉のかさかさという音にも、自然を感じることが大切であろう。現代人は、とくに都会生活をしているものは、自然との対話がなさすぎる。機械文明の進歩発展は、たしかに人間生活を豊かにし、快適なものにしたが、一面、人びとを疲れさせている。

この夏から秋のはじめにかけて、中央アジアに旅をしたが、広漠とした砂漠に囲まれた、オアシスのなかで、人びとは、自然を愛し、水を大切にしてい、文明に汚されることなく、お互いに信じ合いながら、美しい心をもちつづけている姿に接することができた。最初からかれらは、自然や水に恵まれていたわけではない。むしろ、砂漠をわたり険阻な山々を喘ぎながら越えてきて、そこに見つけた貴重な自然や水であった。そのきれいな水や自然を、かれらは大切にまもつたのである。

水のあるところ自然の緑が育ち、文明は生み出されていく。しかし、美しい水によって育かれた文明も、やがて文明によって水を濁らしめている。文明により汚されていく自然のなかに、人間の心もまた毒されている。

「心を洗う甘露の水、目を悦ばしむ、妙華の雲、同生の機識り易く、等寿の量分ち難し。衆多けれども道を廃することなく、声遠けれども聞くを妨げず。」
心を洗う自然や水のこころを大切にしたいものである。



《カイバル峠》

Ⅱ
—
Ⅱ

文明国へ行きたがるのは二流国民で、一流国民は未開国へ行く、といったイギリス人がいる。そんな言葉に勇気づけられて、アフガニスタンの旅に出かけたのは、真夏の暑さも峠を越して、そぞろ秋風の立つ九月のはじめであった。パキス

バーミヤンのみ佛たち

アフガニスタンの調査から

タンのペシャワールあとにして、平野部から荒涼とした山間部をぬって、九十^九折の有名なカイバル峠をのぼって行く。

標高一千百米のこの峠の歴史は古く、紀元前一千五百年前後の時代に、中央アジアから、インダス河流域に移動したインドアーリア人や、前四世紀末の東方に遠征したアレキサンダー王なども、この峠を越したのである。近かくは、十九世紀中期のアフガン戦争のときも、この地に侵入したイギリス軍も、みなここを通った名高い歴史的な峠である。

峠より東の方へ見おろすパキスタンの大平原をあとに、アフガニスタンの国境に入った。

道路は完全舗装である。この素敵な道路はソ連の援助によってできた道路だという。カーブルから東パキスタンへ向かってアメリカが道路を建設しつつあるとも聞く。このことについて、トインビーは、「アフガニスタンの新道路は、今日ソ連とアメリカの間で行なわれている政治上の競走から生ま

れた、経済的なボーナスにはかならない。ボーナスは値打ちがあるが、これに伴う危険もまた大きい。この十字路は経済的資産たるのみならず、戦略的資産でもあるが、戦略的資産は政治目的にはのどから手の出そうな代物なのである」といつている。快適な道路であるが、一端事が起きると危険きわまりない道路でもある。

その道路を通って、アフガニスタンの最初の町ジェラバードに到着した。ジェラバードは国境に対する要衝の町である。死神と隣りあわせの町といわれるほど、この暑さは世界でも有数であるといわれている。盆地のため通風も悪く気温は五十度に近く。ギラギラとした太陽が眩しい。このジェラバードから南へ折れると、ハッダの遺跡がある。魅力的な塑造の仏像が発見されたところである。

ジェラバードをあとに溪谷をのぼっていくと、両側に岩壁が切り立ち、カーブル川の急流がつづく。激越な流れはすばらしく躍動的である。暑さはいぜんつづく。車の窓をあければ、熱風が入り込むので、エアコンのきかない車中で炎熱地獄とたたかいながら、せめてもの景観に涼気をもとめていた。やがてソロビのダムを経て、高原をのぼりきり、アフガニスタンの首都カーブルに着いたのは夕暮であった。

カーブルは独立記念日の祭りにはなやんでいた。

アフガニスタンは海がなく、山が多いところである。国の北半分は万年雪をいたたく、ヒンドウクツシュ山脈が連なり、その間を縦横にふかい溪谷がいりくんでいる。

七色にかがやく岩と水とのコントラストはすばらしく美しい。とくにバンディ・アミールの景観はその代表的なものであらう。

アフガニスタンは、内陸国家のなげきもあるが、昔は、東西をむすぶ貿易路上を、キャラバンが行きかう、にぎやかな交通路であった。物資の流通もはげしく、それにともなう特色のある文化が育った。

古代、中世のアフガニスタンを「文明の十字路」とよぶ人のあるのもこのためである。中国からインドに向った人をみても、四世紀の求法僧の法顕や、七世紀の玄奘など、みなアフガニスタンを通って、インドへ入ったのである。カーブルの北にベブラームという遺跡がある。二世紀のころ、クシャーン王朝時代の夏の離宮のあとがあつて、ガンダーラ美術や、大乘仏教との関係の深いカニシカ王なども避暑したところであるといわれる。

わたしたちは、朝カーブルを出発してガタガタ道をマイクロバスで揺られること八時間、初秋のバーミヤンを訪ねた。バーミヤンは、山に囲まれていて、東へ流れる川だけが狭い咽喉をひらいたようなかたちで外に通じている。

このような土地が、千数百年前に栄えたのは、地理的条件がそなわっていたからであった。北のオクサス川流域、南のインドス河流域とを結ぶ主要な通路が、ここを通っていた。インドの仏教が東方に伝えられたのも、ここが主要な中継ぎの場所であった。仏教徒が、岩壁に信仰のあとをのこしたのも当然のことである。

バーミヤン訪ねた玄奘は大唐西域記につぎのように記している。

「梵衍那国（現在のバーミヤン）は東西二千余里、南北二百余里、雪山中にあり、……人は山谷に依り勢を遂うて邑居す。国の大都域は崖に拠り谷に跨り、長は六七里ありて北は高巖を背にす。富麦あれども華果は少く、商牧に宜しくして羊馬は多し……。

上は三宝より下は百神に至るまで、誠に輪（いた）し心を竭（つく）して崇敬せざるなし。商估往来の者にも天神は徽祥を現じ、崇豪を示し、福德を求めしむ。伽藍數十所、僧徒数千人、小乗説出世部を宗案す」



《バーミヤンの大石仏》

さらに、王城の東北の山麓に、立仏の石像があり、高さ四、五十尺、金色に光り輝いて、宝飾煥爛（かんらん）として、東に伽藍があり、この国の先王が建てたものであり、伽藍の東に鎗石の釈迦の立像がある。高さは百余尺、身を分かち別に鑄て、総合して成立していること等が、述べられている。

三

バーミヤンの谷は、緑の豊かなオアシスであり、エメラル

ド・グリーンの美しい沃野がひろがっている。

朝目をさまして、ホテルの裏庭より、眼前に展開する大石窟はさすがにすばらしいものである。

大仏に近づいて、その足もとに立つとさすがに大きさとボリュームに圧倒される。



《バミヤンのホテル》

大仏と小仏の寸法は、玄奘がのべている通りで、左手に五十三米の大仏と古手に三十五米の小仏が立ち、この間に大小数千の窟龕（くつが）が刻みこまれている。

しかし、玄奘が訪れたときは、金色燦然と光り輝いていた大仏も今は金箔がはげて、荒々しく削りとられている。偶像を排斥するイスラム教徒の仕業であった。イスラムの侵入前までは、ここは仏教が栄えたことがよ

く偲ばれる。

地山は砂利のまじった砂岩である。小仏にくらべて大仏はやはり堂々としており、ガンダーラ仏像にくらべて、衣の襞像は形式化されているが、衣文の下にもりあがっている胴体や両腿のボリュームはすばらしい。

この大仏の窟院の頂部と側面には、かつて数多くの壁画が彩られていたが、いまはその大部分が剝り落されて、頭部のあたりにわずか残っているにすぎない。菩薩坐像三体と小さく裸の楽天二体が描かかれているのがあざやかにみえる。

大仏から東方へ四百米ばかり進むと、高さ三十五米の小仏がある。いま大仏を見てきたばかりなので、大きさについては、さほどの感動は受けないが、たくましい体つきや衣文の様式など、両者はよく似ている。普通、この両石仏の年代については、大仏の方がインドのグプタ朝マトウラ系の仏像に似ているので五世紀ごろの作といわれ、小仏の方はガンダーラ仏との相似から四世紀ごろといわれている。しかし、実際に現地を訪れてみると、それほどの時代的差は感じられない。

ただ小仏の龕の壁画は、大仏のそれと大きな違いを見せている。頂上に青い地色の上に、有翼の白馬四頭にひかれた車が描かれ、その上に御者や武人を従えた太陽神が立っている



《ガンダーラのアポロン仏》

のが削りとられた間からみえる。外套も長い剣もイラン風で、いかにも太陽を象徴しているような日輪を背景にしている。

インドのグプタ朝文化とイランのササン朝の文化が、芸術の上でも混合し相競ったのではなからうか。そのようなことが偲ばれる。古くから西北インドと深い関係のあったクシャーン朝の諸王は、厚く仏教を尊崇していた。大クシャーン朝は、三世紀中葉、西方のササン朝のシャープール一世に征服され、四世紀に入ると、グプタ朝やササン朝にしばしば侵入された。こうした衰運に陥ったクシャーン朝を回復したのが四世

紀の末のクシャーン王キダラで、これをキダラ・クシャーン朝といわれている。

バーミヤンの大仏が作られたのは、まさにこの頃であろうとも想定されている。

バーミヤンの谷を歩いてみると、かつて栄えたバーミヤンのオアシスの美しさが、まざまざと甦がえってくる。この美しさを無残な荒廃に帰したのは、チンギス・ハーンの蒙古軍であった。

いまもバーミヤン盆地の中央に円錐形をした小高い丘がある。シャリゴルゴラといわれる遺跡がある。この遺跡は、千二百二十一年から二十二年にかけて、チンギス・ハーンによって赤ん坊も、猫の子一匹も残さず、徹底的に破壊されたバーミヤン王の都城である。当時は、バーミヤンの国は豊かで兵も強かったので、王は侵入する蒙古軍にはげしい抵抗をした。チンギス・ハーンの孫が、ここで戦死をしたのである。チンギス・ハーンは激怒して、みづから軍を率いて、バーミヤン王の居城を絶滅したのである。シャリゴルゴラとは、妖怪の町という意味だといわれるが、その崩れた廃墟には、現在も人骨がみられる。バーミヤンの初秋は美しく、秋草も風にゆられて爽やかであったが、この丘にはなんとなく歴史の伝える陰惨の気がただよっていた。

(宮林 記)

三つの言葉

「ごめんなさいーありがとうー」
はい



〈大分県佐賀関町〉
丹羽勝子遺稿集より

畏友丹羽演誠氏は、愛するその夫人を一年前に亡くした。病弱の身で苦難と闘い、矢尽き刀折れてこの世を去って行った夫人は、まだ若い働き盛りであっただけに、し残した仕事も多く心残りであったに違いない。しかし夫人は温い夫の力に励まされつつ、念仏生活に生き続け、そして死んで行った。書き残された幾つかの作品を、丹羽氏はその一周忌に遺稿として知友にわかれ、追善の志とされた。その中には尊い人生との闘いと、温い人間の情が漂っている。これを単に遺稿集の中にとどめ置くことは勿体ない。浄土の読者にも読んでもらい、心の糧としてもらいたい。亡き夫人も、また喜ばれるに違いない。心から冥福を祈って止まない。
—安居香山—

白線の帽子と新しい制服。長男は小学校の時と同様、父親に連れられ、嬉しそうに入学式に行きました。その後姿を見送っていると、中学生になるまでの間、何一つこの子の為にしてあげられなかった私は、母親としての責任感からというようにはっきりとした型ではなく、只心苦しくすまない気持ちにさそわれるのでした。この子が産声を上げる一年前、保育園を主人と二人で始めました。地元の人達の協力で、どうか認可も下り一息ついたものの、私は産後の無理が嵩じて、身体に痛みを感じ初めました。近くの医師は、「多発性関節炎」即ち「リュウマチ」と診断されました。

まだ若かった私には、「年寄り病」としか考えられず少々の痛みもこらえこらえしながらやっていると、うち二男の出産。年子の子供に、自分の病氣も追いまわされ、落着いて治療するひまありませんでした。そうこうしているうちに、保育園建設途中で主人が倒れ、二年間の闘病生活が始まりました。

弟は京都の大学に入ったばかりで心身共につかれきっている私は、更に、病院生活をする主人と弟の学資という大きな負担を課されたのです。現実の諸問題を背負わされた私はリュウマチと雖も安閑としていることは全く出来ません。三才と二才の子供をかかえ、私の人生は新しく始まりました。住

職不在の寺に病人の留守番ですから、寺はさびる一方でした。法務は隣りの老僧に依頼しました。私は専ら檀家との関係が遠くなる事を心配しました。幸い檀家の方々は色々と気を付けて下さいました。昼間は寺と園に追いまわされ、夕方近くになれば、二人の子供を老母の膝にあずけ、私は病院にいる主人の所へ。その日のおもだった出来事を話し、電車にとびのり、田舎道を走り乍ら我が家に戻る日が来る日も来る日も続きました。幼い子供達のスヤスヤねむっている寝顔を見ては、生活のことで一杯でした。

そうこうしているうち二年がすぎ、春の訪れと共に主人が退院しました。そうして間もなく、弟も京都の大学を卒業しました。女子供ばかりの寺にも、春らしい気配が漂いはじめました。私はその空気を全身に感じ、こんなうれしいことはありませんでした。子供も保育園に行く年頃となり、ホット一息つきました。

でも、東の間の安堵の次には、昭和三十三年十一月、癌の宣告が私を待っていたのです。二男は里の親にあずけ、十二月の十五日に、一回目の手術を行いました。一回目は失敗でした。続いて二回目は一カ月後、年あけて間もない正月の十五日でした。主人や母や、家内のものは病氣のことを秘密にしておりました。私には一切口を塞いで話してくれませんか。

しかし、みんなの表情が何んとなくおかしいと感じた私は一回目の手術室での模様を良く知っていたので、二回目ともなれば一時はもう死を選びたくさえなっていました。二週間、色々考えました。あれこれ考えた揚句、二人の子供の為にどうしても生抜かねばならない事を知らされました。その強い決心は、二回目の手術を待つことと、その手術に対抗出来る身体を作る事に早代りしました。栄養を取る事と心の平生を得る読書に明け暮れ乍ら、手術の日を指折り数えました。正月を待つ子供の気分といえは言いすぎかも知れませんが、正直いってそれに近いものでした。

いよいよ手術の当日、私は早朝から身体を清め髪もきれいにほぐし、ベットのの上に静座しました。三十二才までの生涯が次々に脳裡に浮んできます。良く遊んだ子供時代。楽しかった娘時代。あわただしかった入院生活。子供の成長。寺に生まれ、寺に嫁いだ身の有難さ。今日迄育ててくれた母親のこと。お世話をかけた主人や、子供のこと……私はそれらのものに心中でお礼を言っていました。そしてそれは又もや一筋の念仏にかわりました。おかげで時の来るのを安心して待てました。母は早くから傍に来てくれていましたが、口走ることとはうらはらに全く落付をなくしていました。多分母はこれが最後かもしれないと思っていたのでしょう。

「何か言いたい事があれば……」

と瞳に涙を浮べながら、私を元気づけるのでした。私は二人の子の母親になり乍らも、母親に甘えたい気持ちが一杯で、母親の無限の愛情に泣かされました。

いよいよきれいな寝まきにきがえ、迎いの車に乗って手術室に入りました。主人に一目と思いましたが、生来、家庭内の事は犠牲にしても法務をゆるがせにしない主人は、法事に出了まま姿を見せませんでした。

死線を越えた心境は、恰も、鯉が俎にのせられている時の様でした。何とも言えない味気なさ。一回目の手術の折、手術の模様をはじめ部屋の隅々迄知りすぎている私には、それはそれとも言えませんでした。白衣に身をかためた三人の医師、九人の看護婦さんに囲まれ「よろしくお願いいたします」と挨拶し、すかさず大声で「南無阿弥陀仏」のお念仏を唱えました。一回目はマスイがよくきいて余り苦痛を感じないうちに移りました。が二回目では仲々マスイも良く効かず、何にも彼にも手に取る様によくわかるのでした。一生懸命唱え出したお念仏も五時間余の手術ともなればつかれきってしまいました。手術が終り自分の部屋に戻った時は、とつぷり日が暮れていました。何となく今迄の世界が一変した様な思いでした。夜は主人も友人と共に駆けつけ、居続けた母

と一緒に病状を見守っていてくれました。やがて東の空が白み、暗い夜が明けました。でも手術の経過はまだまだ分る段階ではありません。で、翌日からベットに伏した私の入院生活は、お念仏が日課でした。

それから数日がたちました。或日、私は不思議な夢を見ました。み仏様が野原にお立ちになり、しきりに「助けてやるぞ」と申されるのです。私は余りのうれしさに有難うございまずと繰返し合掌している所で夢は覚めました。この不思議な夢を一度ならず二度も見ました。私は夢とは言え勿体ない気がして感謝の生活をせずにはおられませんでした。

その夢を境に、病氣は日に増し快方に向いました。主治医の先生は余りの恢復振りに驚いていました。しかし、同時にのこしてきた子を想う心が重なり重なり、私の身体中に渦巻いてきました。週に一度来てくれる子供。来てくれた時はうれしくて何から話してよいか分らない気持ちも、帰る時は見送り乍ら、幾度泣いたかわかりません。経過は順調でした。でも六十回のコバルト治療が残っていました。別に病氣を持っている私には、この六十回のコバルト治療は無理でなかろうかと、医師や看護婦さんはしきりに心配してくれました。それでなくても六十回続く人は稀れで、殆んどの患者が途中で異常を感じていた模様です。異常を感じた時は中断しなければ

ばなりません。それなのに私は一回の休みも変わったこともなく、六十回完全にかけて終りました。子供のまつ家に帰りたい一念がそうさせたのでしょう。半年ぶりに退院出来たうれしさ、それはそれは、私自身は勿論、家内中の者のよろこびでした。口ではとてもとても表わせないよろこびでした。

想えば、もう六年間の月日が流れました。不治といわれる癌も早期発見故に助かったのでしょう。けれどもリウマチの方はいままって頑固で不自由な生活を続けています。女学校時代、スポーツ選手だった私。教員時代とても元気だった私。教え子達や友達は、自分の事の様にくやしがつてくれました。しかし、過去は過去、今は与えられた宿命をきりひらき喜んで生きることのみ。主人はいつか、

「病氣と仲良くする事だ」

と教えてくれました。先日、「風雪の花」と題する順教尼の本を知人からいただきました。私以上の苦しみを乗りこえられた順教尼の真実の姿がありとうかがえ、非常に力強い杖を私に与えてくれました。特に足の悪い私には立働く事すら出来ず苦しみました。しかし立働く事のみが人生の全てでない事を教えられ、自分に出来る範囲の仕事の中にも又尊い仕事がある事を知り、ひとりよがりの心もどこかに去ってしまいました。子供の学習の世話や園の事務等、仕事は

私を待っていてくれます。私の日課は、十三の仏様の礼拝から始められます。只今では、習字や英語の勉強等も出来る程心にゆとりが持てる様になりました。今生きているうちに功德を積み、次の世に生まれる時に健康な人になってきたいと思います。私は不治と言われる癌から奇跡的に助かり、信仰の尊さと念仏の有難さをしみじみ味わいました。

唱えても唱えても信仰と念仏という一筋の光明は、総てをあきらめ、ぐちを私から遠ざけてくれます。日々合掌の生活が出来た様になった事をうれしく思います。毎日の生活の中で「すみません。ごめんなさい。有難うございます」の三つの言葉が素直に言える様になった事もこんな所より来たのでしょう。いつ迄、不自由な生活が続くかわかりません。

ですから余計に手足身体の有難さが分り、それ以上に人の親切が有難く思われます。つい先日のこと、長男の机の中から、あらまし次の様な作文が出てきました。小学校を卒える時の文集に寄せたものです。

僕はお寺の長男として生まれました。僕はお寺の後つぎをしなければなりません。しかしお母さんは僕が生まれるとまもなく病氣になりました。小学校の入学式にはお父さんに連れられてきました。それからの授業参観日にも、お父さんがお母さんの代りに来てくれました。卒業する迄に

一回位はお母さんに来てもらいたいと思いましたが、とうとう卒業式もお父さんに来てもらいました。お母さんも、色々新薬を飲み治療していますが、なかなかおりません。僕は病気がにくらしくてなりません。だから僕は寺を弟にゆずって、お医者さんになる事を決心しました。そうしてお母さんの病気をなおし、同時にお母さんと、同じ様な病気で困っている人達を助けたいと思います。

私はこの文をこっそり読み、子供に対してすまない気持ちで一杯でいる矢先でしたから、尚更にそのいじらしさに泣かされました。この様にして思ってくれている子供がいるからこそ、生き長らえられたのだとつくづく思いました。そうして、も一度元気になり子供たちのわがままをきいてやり、主人にもわがままを言わせてやり度い気持ちになるのでした。

或る日次男が、「お兄さんは何か心配事がありそうよ」とさも心配そうに伝えてくれました。私は長男を呼び、早速尋ねました。彼は仲々口を割りません。心の中では「もう、悩みを持つ迄に成長したのかしら？」と思うと、不安な気持ちにもなりました。そこで私は、「お母さんも大きくなるにつれて心配や悩みも出来てきたのよ」

と、優しくいいきかせました。長男は何時迄も固く結んでいた口許をほころばせました。要は自転車の接触事故で、相

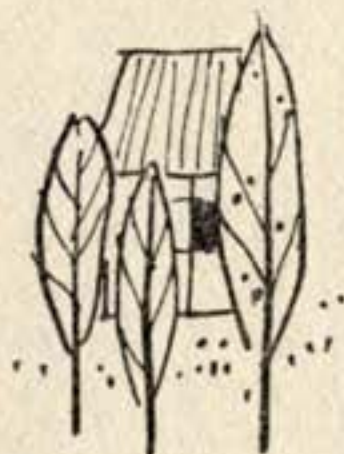
手に怪我でもという心配振りでした。一寸した事でしたので安心しましたが、悩みなり心配事を自分の心の中に秘める様になった子供の成長振りに驚かされました。主人の入院中は可愛い坊やだった長男が、こんなに成長したのかと思うとあわただしかった人生の半分は終りつつあった事に思い出ははせてまいります。

次男の元気なただいまの声。次いで又玄関のガラス戸があき長男の威勢のよい声がとび込む。それに次ぐ父親の艶の音。三人の姿を見てほっとする私。畳の上にひろげられた新しい本。新しい運動靴、運動服、次々に手に取り見せてくれる。外出一つできない私を喜ばせるのです。何とも言えない新しい品々の香り、私も童心にかえり、女学校の入学式に母に連れられ、あれこれと、新しいものづくめだった頃を思い出し、自分が入学した様な気持ちになりました。一冊、一冊の本の名前の記入は私の仕事です。それを見て喜ぶ子供の姿、横から見ている主人の姿。私は私なりに味う幸福をしみ感ずるのです。

— □ — □ —

— □ — □ —

上人然法



二十五霊場をめぐりて

〔四〕

村上博了

することは生かされることであると感謝の生活と
なっていくのである。この百万遍念仏は誰によ
って教示されたか、よほど高德のお方に相違な
い。百万遍念仏は誰でもどこでもいつでも出来
るみ教である。他人に迷惑がかからない、又老
若男女をいとわない、行い易い、そうして功德
廣大無辺である。一体誰人が教示されたもので
あろうか。これに答えるものは二十五霊場第八
番報恩講寺である。

百万遍念仏は尊く有難いみ教である。仏教のよさは全くこ
こにありといえるであろう。この念仏は代々うけつがれて現
在も各地域諸寺院と念仏講に相伝、有難い行として随時行わ
れている。

一般にお念仏といえは百万遍念仏会のことである。関東地
方をはじめとして各地で、葬式後町内なり部落なりの人々が
多数集って輪となり、新亡者の位牌を中にして、その寺住職
なり念仏講の先達なりが音頭をとって百万遍の大念珠を繰る
ことが慣例である。参加者一同は念仏を唱和する内に、先租
を尊び諸行無常を痛感し、やがて正しい生活の建設へとすす
む。家庭にあっては明るい家庭の因となり果となって、生き

同寺は和歌山県紀伊国海草郡大川浦にあり、大阪難波駅か
ら加太川行電車に乗り、「みさき公園」で下車、四キロほど
を大川行バスに乗り下車、それから二キロ位徒歩、途中左手
は山すそ右手は紀淡海峡の海草打ちよせる海岸であった。ほ
ぼその中間の所に和泉国と紀伊国の境界石がある。紀伊国分
の方は田舎びて自然の状態であった。大川浦は約四十戸、半
農半漁村、海岸ぞいに老松ならび立ち、岸にそっては大小の
岩が乱立し、水しぶきにぬれていた。寺は台地にたち、美し
い楼門があり本堂があり、御本尊は上人御自作と伝えられる
み影像である。寺の座敷から松樹越に湾内が見え、前に淡路
島右手は友が島沖の島があり住吉岬がある。その後方に須磨
明石がかすんで見える。左手はるか沖に小豆島があった。

承元（建永二）元年晩冬、あるいは同二年春ともいわれる、上人の帰途の小さな船は釈迦が鼻、大角鼻を左手に見て小豆島ぞいに紀淡海峡にさしかかったものらしい。

二

上人の勅修御伝はじめ各上人伝には、この報恩講寺について伝えるところがない。私も浄土宗大年表編さん当時、浄土宗に関する史料は死んど眼福の榮に浴したが、この寺については初めてであった。

しかし同寺伝には、上人赦免の帰途、この海峡でたまたまはげしい西北の季節風に襲われ荒波をかぶり、船は上下左右にゆれまさに転覆せんばかりであった。やむなく同湾に避難した。湾内左手に約六十米ほど岩のない砂浜があり油生浜（あぶらうま）と呼ばれている。船は辛じてそこに着船避難に成功した。現在そこには、自然石に「円光大師漂流着船地」とする記念碑が立っている。

大変おつかれになった上人は、七十五才の老軀を辛じて和船から上陸せられると、浜は忽ち瑠璃宝地（るりたから）に変わったと伝えられる。上人化益の善縁が成熟して極楽浄土の宝地が出現したのである。これからこの浜は瑠璃が浜といわれるようになった。同寺伝絵巻には、上人が左右に弟子を伴い上陸する。この時村長阿闍梨孫右エ門夫妻が通り合わせる。

温容生き如来さまのような上人に見とれていると、弟子僧から「法然上人さまです」と小声で明かされる。今をときめく念仏の上人様かと喜び勇んで自宅に案内した。期せずして里人の老若男女集り来て、上人の教化をうけ、人間と生れた生き甲斐を改めて感謝し、その法悦は上人の御滞在を願求し、彼らで草庵を結び、み教えを乞うに至った。それが後の慈雲山報恩講寺である。

寺名の報恩というのは、その厚情が余ほど温く又感銘しなければ名付けられる名称ではない。慈雲という山号も又慈愛を深く感じなければ名のれるものでもない。上人の徳の宏大であった一の証左であろう。ただ上人を飾るものではない、真実有難いとうけとられたればこそ、かかる山号寺号となったのである。講ということは阿弥陀講・観音講・地藏講とあるように、あまたの人々が相集って同信行為をとることである。報恩講とあるのは、上人の摂化教化を多くの人々で永く讃えることを意味する。

この立場に立って見る時、仮令勅伝その他の上人伝に見えなくとも、上人の靈跡に相違ない。同寺の御詠歌は

極楽は かくやあらまし あらたのし

はやまいらばや 南無弥陀弥仏

という。塩飽笠島専称寺と同じである。塩路を渡って初め

て感あり、いかにも実感の充ちた御歌である。と同時に手の舞い足のふむことさえ知らずとする歓喜の様子が感得できる。同寺絵伝には、

一、風波不順 二、当浦へ着船 三、形像刻成 四、念珠造畢 五、臨終留像 六、出船趣撰

の六段からなっている。本文では必要な点は四、念珠造畢ということである。仮令自ら御造りにならなかったとしても、念仏を申す時、あまたの人々と共修ができて心が散乱しないためには、大念珠を繰りつつ御念仏を申すことがよい。先達も調子、ふしをつけた声に高低やながしをつけて申すと、念じ易くまたたのしみである。この時上人は桜材の自像の予材で大念珠をお造りになった。弟子一人と自像をとどめて、別時会のもち方、念仏を申す時の心構えやその他信仰上のいろいろの指導にあてている。里人は海に生きる人々である。つねに体を張って生命がけの毎日である。行い易く修し易く男女の別なく平等利益のあるお念仏は自然に生活として浸透していった。

その大念珠は阿闍梨家に伝持され、現在同家玄関入口の右手の堂に収められていた。堂は念珠堂と呼ばれている。堂が玄関入口の大切な所に置かれていることは、念珠が大切な宝物であるからである。若し万一にも火難や盗難にかかっては

大変なこととなる。又換言すれば一家の守護神であるからであらう。傍に松の老木がある。同家の古いよい家柄であることを物語る。当主は阿闍梨姓を地名の大川と改め、京大の教授の由であって不在がちのため、現在大念珠は寺に収められてあった。黒光りして丸味をおびているから、長年の間人々によって用いられたことが判る。寺には上人御直筆と伝えられる御名号が什宝として保存されている。

同寺住職師のお話しによると、不漁の時は忙がしい、漁夫たちが大漁祈願に参詣するからであるよしであった。大漁の時には又御礼まいりで忙がしい。いずれにしても参詣人は絶えない訳であった。この地の漁夫は、船を漕ぐにも南無阿陀弥仏と斉唱する、綱を曳くにも南無阿陀弥仏とかけ声し、魚を拾い集める時にも南無阿陀弥仏する。

念仏は大声で唱和するほど大漁となると信ぜられ現在に至っている。上人のお念仏は漁をしながらの念仏でなく、これも止むなき生業なりとして、念仏を申しながら漁をする。念仏を申しつつ耕作してきている。従って、この寺の伝承によれば百万遍念仏をすすめられたこととなる。

三

浄土宗大本山に有名な百万遍知恩寺がある。一般にはただ百万遍というだけですぐ判る。上人二十二番霊場であって、

御詠歌は、

我は只 仏にいつか あふひ草

心のつまに かけぬ日ぞなき

という上人の御歌である。仏にいつかあうためには、如来の御本願念仏をつねに申さなければならぬ。その念仏は百万遍念仏でありとする。

百万遍ははじめ鴨川の西現在相国寺地域にあった。御伝にいう賀茂河原屋（神宮堂）である。一条以北は加茂河原であり、上人の草庵があったのでこの名がある。その後所々に移ったが、寛文年中に田中に移る。大殿には世界一大きい百万遍の大念珠を内外陣にわたってかけまわしてある。一個が両手で包めない、それには信者の大願が刻されている。又同寺が百万遍を名のようになったのは、八世善阿上人が後醍醐天皇を奉じて、一七日間百万遍念仏会を修行し、元弘の疫病を征し天皇がお喜びあつて「百万遍」の寺号を勅賜せられたことによる。この時はじめて百万遍を行ったのではなく、上人化益時から厳修され、大利ありと世人が認め知っていたからであった。

四

百万遍念仏について上人は、

仏の願にては候はねども、小阿弥陀経に、若一日若二日

乃至七日、念仏申人、極楽に生ずると、とかれて候へば、七日念仏申べきにて候。その七日のほどの数は、百万遍にあたり候よし。人師釈して候へば、百万遍は七日申べきにて候へども、たえ候はざらん人は、八日九日などにも申され候へかし。さればとて百万遍申さざらん人の、むまるまじきにては候はず、一念十念にても、ほまれ候なり。一念十念にても、むまれ候ほどの念仏とおもひ候。うれしさに百万遍の功德を、かさぬるにて候也

ととかれている。御伝等に七日の別時とあるは百万遍の念仏というてもよい訳である。説戒だけでは一般人は七日も毎日つづかない。そこで大念珠を繰ると面白いし又念仏を申しているうちに、自然とその人なりの信仰が確立する。七日で百万遍にならない人は、九日十日とかかっても差支えない。ただ一念、十念にても往来したり、志す精霊の回向ができる。

この喜びは感謝となつて自然と百万遍の功德をつかむこととなる。時と人の変遷は百万遍をつむことによって、念仏の有難さが自然とあらわれる。

百万遍はよき信仰の姿であり、仏のみ教である。浄土宗の一大特色で有難い行である。



〈バザール風景〉

シルクロードと コーカサスへの旅日記

— 六一 —

佐藤 治 子

三月三十日。雨に殆んど降られ続けのサマルカンドを後に四十分程で再びタシケントへ戻った。ここが飛行機の各地へ向けての出発点なのである。一時間時計を進めた。

おそいおひるをすませてから、私はホテル内の美容院へ行った。ユーラーさんに私の注文をロシア語で一つ何々と簡条書きに分り易くかいて頂いておいた紙をみせた。値段は一ルーブルという。洗面するように顔を下へ向けて洗いはじめた。ごしごしと手荒い。鼻をぶっつけそうになるのでタオルをたたんでそっと顔にあてる。髪をセットするにも何も言葉が分

らぬまま、手まね、身ぶりで動かされる。時々何かいっては「ハラシヨ？」という。これだけは分る。ハラシヨとはありがたいという事ときかされていた私は「まあ、有難うといえというのかな」、アリガトウの押し売りみたいと一寸しゃくにさわる。どうもいただけないやり方である。又ハラシヨ？という。丁度この程度ならと思ったので「オーケー」とはっきりいうと、何とオーケーは分るらしい。ニコツとして、OKと答えてくる。美容院の人達は私のもって行った洗料のびんを替るがわるながめたりすかしたりしにやって来る。出発前に「日本字の本はあまり見せないように。もしもって行くなら英語で表紙に一言かいておくとよい」と、注意されていたので、前の事だから新聞の切り抜きは全然もって行かないで「武士の娘」という英語の本を一冊だけもって行った。それをドレイヤーにかかっている間よんでいた。向うは英語は分らない。只時々のごくような事をして前を行ったり来たりしている。どうやらすんだので、まあまあというわけで部屋へかけ帰る。お連れの婦人達は私の美容院行の成果に多少の期待をもっていていられたらしい。「佐藤さん、セットに行らした？」「ええ、行って来ました」「まあ、それでセットしたの？」

と目を丸くして、「じゃあ私達は部屋で洗いましょうよ」と、いうことになってしまった。でも私はいくらかさっぱりして、洗濯にとりかかった。

三十一日、七時に起床、この日はタシケントのバサール（大きな市場で有名）一廻り。旧市内を一巡し、コルホーズへ行く事になっている。食後ホテルの前で全員集合するのを待つ。一日おくれて二班が合流、ここよりはA班全員で行動を共にすることになった。ブハラへ行く折泊った時は雪が積っていたのに、数日を経ずして戻ってみると雪など一塊もない。「草萌え」の季に入っているにおどろいてしまった。急に春が来るのだ。

バスにのりこむ。一度来たことのある広い通り。ひげをピンとはやした交通整理のお巡さんもなつかしい。バザール前で特に「はぐれないように。迷い子になると、中々探せませんよ」と、注意を受ける。背の高いユーラーさんの後について行く。いるわいるわ、門前市をなすという言葉通り買物の人が続く。ぐるぐる店々の間の径をまわりくねっている時に、長い行列を見、オレンジをみつけたのである。三十分の予定が迷い子になった人がいた為、皆イライラする。結局外側を一廻りしてようやくその人達をみつけたのである。

バスは旧市内へ入る。ごみ一つない位、どんな露路でもき

れいに掃かれている。土塀の低い家並を通りブラックハンのモスクへ行く。現在でもイスラム教信者が来る所だそうだ。このモスクの近くの道、家並は映画のロケの行われる昔のままの姿でいる一部落。実に道がきれいなのおどろく。

バスはアパート町の新市街へ向う。これはとおどろきの目をみはるアパート町。大地震の時、ソ連全国から援助の手がさしのべられ、各地区の土木建築の会社は各自の地区の仕事を一時中止して、ここの復興にあたったといわれている。各地が受けもって建てたアパート毎にその地方独特の模様がかけられている。カザック模様とか、タジク模様というように。日本の団地の比ではない。「これはすごい」と、あちらこちらで感嘆の声を上げる。大したものだ。

ホテルに戻り昼食、そして三時半コルホーズへ出発。市外に出て約一時間ドライブする。遠くに天山山脈に連なる山なみが見え、雄大な景色が展開していく。綿の産地だけあって丁度トラックに一杯荷物を積んだ位の綿の山があちこちに見える。残念なことに今は曠野で何もない冬景色。札幌の北大の並木の何倍かの白樺を中心に、農耕部落（コルホーズ）に学校・競技場・劇場と広々と地所をつかって建てられている。人口は一万三千人で半分は朝鮮の人、ウズベック・カザック・タタール・ロシアと民族は十三、この村に住まってい

るそうである。綿が最大の産物、米・麦・モロコシ・麻等も作っている。学校数が八つ、託児所もある。

部落議会の議長は朝鮮の人、この人に迎えられて校長先生や役人達に紹介され、見学する。ソホーズは国营、コルホーズは民間で経営されている。

夕食は部落の朝鮮の婦人達の手料理を供される。タシケントのコルホーズは有名らしい。だから案内してもらえたのだろう。又五ドルづつ支払われる。食事とバス代として。メーソンのテーブルには村長・議長・校長等お偉方とイントーリストの人達が座る。乾杯々と幾度か祝杯をあげさせられる。どちらがごちそうしたことになるのか。完全なお招きではない。手数はかけたけれども自分持ちの「ごちそう」である。御礼をどの程度のべるべきか、中途半端な気持であった。お酒でよい機嫌の人達は一時間のバスの中で歌をうたい通して、ホテルへ戻ったのであった。

四月一日。九時朝食の後、荷物をバスにつみこみ、二台のバスは小学校見学へと向った。学校の先生方にとって色々見たり聞いたりする事は興味深いことである。まず全員一部屋に集り説明をきく。不思議なことにすばらしい通訳をしているユーラーさんはバトンを美しい大学出たてのエレナさんに渡してしまった。先生達の次々と出る質問にたじたじのエレ

ナさん。超過勤務の時の手当は？ とか、一々その学校の校長さんにきいては訳す。しかも労働時間等とむずかしい質問に汗だくのエレナさんの通訳はピンとこない。「計算が合わないね」「変だね」と、日本の先生方首をかしげている。何故ユーラーさんはバトンを渡してしまったのだろう。途中から部屋を出て行ってしまった。

エレナさんはあとで「佐藤さん、私の通訳、貴女わかりましたか？」「ああいう質問と答えの両方の通訳はむずかしいですね、でも貴女一生懸命なさっていらしたわ。」これだけが私の口を出たなぐさめの一言であった。ふき清めたばかりらしい廊下を通過して講堂でおどりをみせてもらう。又教室でみた女の子達、ベルが鳴って教室を出て来た子達のかわいいこと、目がくるつとして利口そうな顔々。服装もきれいだ。空港へ向うバスに乗りこんだ私達を十人位の子達が先生に連れられて並び、手を振って見送ってくれた。

二時二十分発のジェット機でグルジア共和国の首都トビリシへ飛び立った。カスピ海上空を通り三時間かかるといふ。私達の隣りの席はグルジアの農民らしい人達。服装も顔立ちもうすぎたない、けれどあめをくれたり、言葉が分れば話したげな様子である。山脈にかこまれた台地の上空から下降に移る時、すーと温度が変わったと思った時、今までしゃべった

へかわいい子供たち



りカードで遊んでいたその人達の中の一人があつという間に吐きはじめた。窓ぎわに一人腰かけていた日本の女の先生は背中をさすったり介抱している。私はスツ―とする薬をと思ったが、言葉の通じぬ悲しさ、説明しようがない。付添いの人が荒くれた手でよごれを始末している。ガスンガスンと着陸。あつという間の出来事であつた。

降り立つと風がひどく冷い。丁度軽井沢のような感じだ。かけるように空港内へかけ入る。時計を二時間戻す。低い松の続く淋しい道をバスは走る。どの辺にホテルがあるのかしら。廻りくねる道の左右は木ばかり。風が荒い。空港より三十分かかって町並に入る。あとで山から見下ろした町は山脈の麓に細く伸びている事が分った。

中央を流れるクラ川の橋を渡りモダンなホテルに到着。一番高い建物のロビーから見下ろせる町はウィーンを思い出

す。中央アジアから三時間西へ飛んだここ、トビリシは東洋の西の端、ヨーロッパの一番の東にある。西洋風な建築の並ぶ町、広い並木道。何という違いだろう。中央アジアの泥くささ、そしてあの日本人に親近感をもたせる、しわの深いタジク人達。僅かの時間で全くヨーロッパの淋しい町へ来たようだ。教会があちこちに見える。乾燥の国から来た私にはゆるやかに流れるクラ川にかかる橋、日なたから日かげに入った感じがする。割当てられた部屋も完全な西洋式ホテル。久々にしつとりとした落付きをとり戻した。

うす寒げな暗い、けれどウィーンを思い出させる町。クラ川はダニュープ河みたいにくつろげる気分、まず手を洗い、日本茶をのんでなどと楽しんで、水道の蛇口を廻す。水は出てこない。あれあれ？ どこかこわれているかな、廊下へ出て例の番人のような女史に手まねで聞いてみた。断水らしい。水が出ないと隣の部屋の人も出て来られた。夕食は階下の別館ですとのアナウンス。別館で手を洗おう、お湯ももらえるだろうとおやかを下げて行ってみたっやっぱり出ない。この手でパンをちぎって夕食を食べるのかしら。仕方がない。ハンドバックの小出しに入れておいた紙のぬれタオルの小袋を取り出し、主人と半分づつにし、近所の席の方にそつとあげた。食堂にはお湯もあろう。エリーナさんやユー

ラーさんをわずらわせるのもと、自分で近くの調理室へ行ってみる。「佐藤さんお湯ですか？」向うの方の席から素早くエリーナさんがかけつけたのだ。目が早いなど、いささか気味が変わる。結局お湯もなくベットへ入り込むまで水なしにあったのだ。蛇口を少し開けてベットに横になる間にねてしまったらしい。ドンドンドンと戸をはげしく何かわめきながら叩く音に目がさめた。この叩き方であの部屋この部屋と叩き起したらしい。「蛇口をしめなさい」といつているのか「水が出ますよ」といつて起して廻ったのか。チョロチョロと水は出て来た。十八階もあるこの大ホテルの事だから緊急用の水の用意位あるはずだ。ウィーンを思い出していたムードは現実のソ連へと引き戻された感じである。

二日。メチュヒ寺院を最初に見学。谷に長々と伸びる山間の古い町を吹く冷たい風にマフラーを頭からぐるぐるまきつける。クラ川に切り立つ崖の上に温泉の建物が並んでいる。行ってみたい、けれど自由はきかない旅行である。

対岸のダビデの丘へドライブする。山の中腹に立っている女神の像。高さ二十二米もある大きな銀色の像は片手に盆を、もう一方は剣をもっている。友情をもって友人は迎えるが、攻め込む者にはするどい刃で立ち向う意味だそう。町へ下り、シオン寺院を拝観する。六世紀に造られた石造建

築。「静かに」といわれて入って行くとミサが行なわれている。宗教が生きている。黒いベールをかぶった婦人達三四名が神父様の祈りにひざまづいている。しゅんとしてしまった。

昼食後、三十キロ離れたムツヘタの町へと向う。山間の道はトルコが攻め入るといふ時、ロシアに援軍をたのみ作られたという軍用道路で、今はブドウ畑が続く。ソ連の九十五パーセントの紅茶を産するといふコルホーズの農地が山あい、平地に延びている。西暦紀元一年に創立されたといふムツヘタの町のうら淋しいこと。スコットランドのハイランドを思い出させる寒々しい、けれど郊外の山頂にあるジュバリー教会は皆を偲ばせる厳然とした姿を残している。

モスレムの国に囲まれたこのキリスト教の古い町、トビリシを夕食後山崎夫妻と四人で散歩してみた。灯のともる広い道路の並木に何の鳥か何百羽も立木に止まり、次の木の枝に飛び移る異様な風景をみたり、この町の産物という金具の製品の店をのぞいたり、酒屋の中へ入り並べてあるお酒のビンを眺めたり、往来しているグルジアの人達に交って気楽に歩いた事は楽しい。暗くなった空に十八階の高いホテルが見えて来た。翌日は有名な避暑避寒の地、ソチへ向うのだ。そしてモスコへ。

十二因縁

—その11—



先世の宿業(生)

渋谷 賢 応

(長野県茅野市心光寺住職)

十二因縁がその構成上、四つの因果より成り立っていることについては前に学びました。くりかえしますと、第一無明と行、第二識と名色、第三六処より有まで、そして第四としてこの生と老死であります。前の例に倣ってこの因果を名づけるならば生物現象としての過程であり生物学的因果と名づけることができると思います。

端的に申すならば「生あるものは必ず死す」と言う因果でありまして、その生を起因しているものが、六処よりはじまる愛慾の因果であることも、もっと突っ込んで

言えば愛の快感的な意欲の果として有という生存の意識をうみ、これが生へつながらるものとなっているのでして、この異質の因果を、有と生で結びつけているのも甚だ妙と思われてなりません。

前に四苦八苦の項の「生」において学びましたように、この場合の生も「生きる」とか「生活する」という生ではなくて、「生まれる」とかなのであります。私たちは生きていく以上、生まれたことを否定するわけにはまいりませんし、生まれたことが老死に結びつくことも否定できません。ただここで言うように、そのことがそのまま迷界流転の相であるということについて、不可思議の感を禁じ得ません。お釈迦さまの言われますように、どうしても「生まれた」ことが悪いのでしよう。「生まれた」ことが悪いとすれば、人はみな死んでしまわなければなりません。「生まれる」ということは、よきこと、めでたかるべきことのはずでございます。

にもかかわらず迷界流転の因となっていると言うことは、生まれるには生まれるに相応したある人とある人との結びつきがあつて生まれたものでして、それが各々もつ業の結果が「生まれる」ということになるのでして、生まれる者の意志の及ばない所にその起因があるわけで

す。「生まれる」ことは生まれる者にとっては全く受動的なことですし、それはむしろ動物的な要因さえともなうて、しかも特定な人の子として生まれるのです。清浄業に積んでいたならば、この世に生まれ出ることすらできないものだからです。ごく当り前なことなのですが、これを当り前の段階から苦の因の究明に掘り下げていかれたお釈迦さまの鋭さを、私たちは新しい感覚をもって受けとめてゆかなければならないと思うのです。

○

百喻經に次のようなお話がございます。

「昔ある人がありました。大勢の中で自分のおとうさんを自慢して言いました。

『僕の父はほんとうに偉い人だと思うよ、やさしくつて、少しも荒々しい言葉も言わず、他人のものを盗むようなこともなく、言うことと行なうことがよく一致して、それでいて他人に施すことを好んで行なっている。ほんとうに偉い人だと思うよ』

それを聞いていた人の中に愚かな人がありました。そして自分の父について、負けてはならじという考えを起したのです。

『僕のおとうさんは君の父よりも偉いんだ』

と威張り出したのです。そこでみんながたずねました。

『どんな所が偉いんだ、おいみんな、それを聞こうじゃないか』

愚かな人の答えて言うのには

『僕のおとうさんは若い時から淫欲を断って、それに汚されたことなど一度もないんだ』

それを聞いたみんなは愚かな人を非難しました。

『若し淫欲を断ったということが本当ならどうしてお前さんが生まれたんだい』

どんなに偉いことを言っても、人間として生を享けている以上、動物的な絆よりぬけ出ることとはできないのです。そして生まれるということが、そのまま父母の業を他動的に受け継ぐことなのです。そのように考えるならば、人間が生まれると言うことは、ある業の結末であつてまた起元であると言うお釈迦さまの深奥な洞察に頭を垂れる思いでございます。

○

法然上人が仏門に入られたことの動機についてはあまりにも有名で今更申し上げるまでもない所ですが、わが浄土宗が、この生得の業よりの離脱として立教開宗にま

で至った遠因を、われわれの肌で感じとるという受けとり方は、必ずしもよくなされているとは言いきれない所と思います。

法然上人の父時国を死に到らしめた者は稲岡の庄の預所、明石源内武者定明であるわけでした、時国が自分の家系が毛並み正しい京都の源氏の出であることを慢ずる心より、地元の預所とそりが合わなくなった結果が定明の夜討ちとなって現れたものでありまして、祖先の血につながる宿敵とでも申しましょうか。御伝「時国の死」の項には次のように記されています。

時国ふかき疵をかうぶりて死門にのぞむとき、九歳の小児にむかひていはく「汝さらに会稽の耻を思ひ、敵人をうらむる事なかれ。これ偏に先世の宿業なり。もし遺恨をむすばば、そのあだ世々につきがたかるべし。しかしはやく俗をのがれ家を出て我が菩提をとぶらひ、みづからの解脱を求めんには」といひて端座して西にむかひ、合掌して仏を念じ、眠るがごとくして息絶えにけり。

平安末より鎌倉にかけて諸宗ともに数多い巨匠を輩出し、抜きん出たお祖始さま方を生み出しました。しかしながら、その出家の動機において、このような生ま生ま

しい事実を契機としておられる方は上人をのぞいて他に類例を見ません。それだけに仏門に入られてからもその名利に溺れて大衆を救うに術なき仏教界を深く憂うる結果となったのでしょうし、上人が第二の出家として立教開宗を宣言せられる基本的な縁ともなっているものと思われるのです。他のお祖始さまのようにあえてご自身のことを語られない上人の心底に、いつも去来していたものはこの九歳の時の父上の遺言であつたと思います。上人十六歳にしてすでに隱遁の志を表明せられました。もうこの時より、心に深く期するところがあつたと思われてなりません。そして十八歳の御年、西塔黒谷の慈眼房叡空上人の室に入られたその時「幼稚の昔より成人の今に至るまで、父の遺言わすれがたくして」とその心情を述懐せられておられるわけですが、この十八歳のお歳のこの感懷は、おそらく終世変らざる影像として上人の心に焼きつき、事あるごとに反省のよすがとなつておられたことと思われるのです。

私たちはこの凄惨な上人出家の因を我がことに置きかえて味わなければ浄土宗学はわからない。わが浄土宗のもつ宗学の体系の背骨に、この悲しい物語りがあると言ふことを、ゆめゆめ忘れてはならないと思うのです。

鬱 憂 の 棟 病

— 人間ドックの記 —



山 香 居 安

人間も四十二の厄年を超えると、何もかもガタガタする。早い話が精力的にガタ落ちである。徹夜の勉強などしようものなら、二三日完全に調子が狂う。或る作家はニンニク焼酎を飲んで、三日三晩でも書き続け、一つの作品が完成するまで努力すると聞いているが、私にはとてもできる芸ではない。元来余り健全でない私は、別にこれという大病はしないのだが、今日は快適だったという日が一年に数えるほどしかない。勿論人の書いたものを読むと、人間の健康などというものはそんなものらしい。毎日快適な生活を送れる人は、余程恵まれた人で、前生で随分よいことをしてきた人に違いない。

前置きが長くなったが、そんなわけで私は、今夏人間ドック入りを決意し、自分の健康について私なりの見極めをしたいと考えた。年相応に忙しくなってきた私は、自分の健康を顧みる暇も少なくなり、同僚や妻から、

「身体も身の内だから、無理しては」

などと忠告されると、健康について神経質な私など、大いに考えさせるものである。しかし、ドック入りしたのはそれだけではない。これを紹介してくれた大学の事務のF君が、

「先生、人間ドックは快適ですよ。テレビ、バス、トイレ付き、冷防完備。夏の静養にはもってこいです

よ」

と推賞した。費用も私学共済で半額という事であった。丁度その頃、頭は痛むし、腸が具合悪いし、いろいろなことで疲れもしていたので、「丁度よい。この機会に健康診断を兼ねて静養してこよう」とホゾを極めて、八月も半ば頃、勢い込んで病院入りをしたというわけである。

ところがである。人間の考えることは誠に浅はかで、自分勝手である。何事も自分中心によいように考えて、それに甘え勝ちである。確かに来てみると、部屋は美しい。ルームクーラーが唸りを立てて涼しい。テレビ、バス、トイレ、冷蔵庫まである。まさにF君が言ったようにホテルである。やさしい看護婦さんが、あれこれと世話をしてくれる。全くもって、酷暑の極楽である。しかしこれは入院直後の事だけであつた。たちまちここで人間ドックの闘争が始まった。一週間のスケジュールに従って、看護婦さんに追い廻され、病院のあらゆる機械にメカニカルな圧力をかけられ、医者の手にもみくちやにされ始めたのである。

「早速ですが、採血します」

そう言って未だ身の廻りも充分整理できていない私の

腕をまくりあげ、ゴムの輪で締めつけ、静脈から一〇Cの血を取りあげた。それから後一週間に、私はこの大切な血を何回採血された事であろう。一週間目の左右の静脈は堅くなり、紫色に大きなあざができていく。元来、血の気の少ない私は、この採血におびえた。人間の血などはそう簡単にできるものでない。一CCは卵一個分の栄養に相当しているとも聞いたことがある。私は看護婦に訴えた。

「そんなに血を採られたら、たまらないね」

「大丈夫ですよ。十回とった所でたかが一〇〇CCですよ。人間の血など、そんな少ないものではありませんよ」

丸でお話しにもならぬと言った返事であつた。そう言えば私は軍隊の頃、重傷を負った同僚の為、二〇〇CCの血を提供したことがあつた。その頃の私は丸々と肥り、真赤な顔をしていた。私が選ばれたのも、同僚と同じA型であつたというだけでなしに、その健康体を認められたからであつた。しかし流石にこの時は参った。真夏というのに寒々とした。軍事訓練は一日だけ休ましてくれ、卵だの特別食を与えられたが、毛布にくるまって一日震えていた。その時の二〇〇CCに比べたら、今の

一〇〇CCなど馬鹿みたいものであることは確かであるが、この頃の私の健康状態から言って、私にはあの時以上に貴重のように思えてならなかった。

採血などは、しかしながらほんのその中の一つにすぎない。ぎっしりつまったいろいろの調査は、あらゆる闘争を私に要求してきた。その一々を此処に書く程のこともないので、その一つだけを紹介してみよう。濃縮試験、糖負荷試験というのが、入院後四日目に行われる。

これは尿検査による内臓の調査である。その為の準備として、前夜から食事制限が行われる。夕食は乾燥食というものである。私はこのスケジュールを見たとき、草か何かを食わされるのかと思った。まさか牛馬じゃあるまいし。そう一人で嘆息した。しかしでてきたものは、こんなものであった。

バターパン 二切、バター棒巻焼き生いか 五コ、卵のおぼろ、

「水やお茶は飲んだらいけませんよ」

夕方五時、看護婦さんはこう命令してお膳を置いて行った。いつも可愛い茶碗に、番茶が一杯人ったのが乗っているのに、それはない。しかも、それ以後明日の昼まで一切命令する以外、水分を飲んでならぬというの

である。これはまさに拷問である。一体、カラカラのパンを水なしで食べろということは何たる事ぞ。もともとのお茶の好きな私は、自分の身体の検査の為であることを忘れて激昂した。真夏でルームクーラーに入った部屋に居ると、それでなくとも咽喉が乾くものである。ボウ然として、私は個室の食卓を眺めていた。

「何もこんな苦勞しに、こんな所に来なくてもよかつたに」

そんな悔恨が、また出てきた。こうした悔恨は、もう二日目からしばしば出ていたのだが、此処に至って極まった感がある。本当に病氣ならまだしも、別に特に病氣という程でもないのに。

しかし、私は諦めた。やはり自分でやって来たのだし、身の為だから。ムシヤムシヤと水なしでパンを食った。できるだけ唾液をためては飲み込んだ。不思議なもので、そうと観念すると、何とか咽喉を通るものである。食事はそんなわけで曲りなりに終ったが、それから一夜、咽喉の乾くのには参った。何回か洗面所に行つてうがいをしてごまかした。翌朝の九時に、看護婦さんがブドウ糖をコップに二杯飲ませてくれた時、始めて私は生きかえった心地がした。水などというものは余り手

近にあるもので、ついその有難さを忘れ勝ちである。軍隊でこれに似た苦しみを味わった事があるが、私は久々に水の有難さを味わって、これも仏縁かと省みた。

家族とも離れ、一人静かに静養する積りであった私は、幾つかの仕事と、本を持ってきた。然しその期待はすべて裏切られた。スケジュールに追い廻されるか、精神的肉体的攻め苦に会うかして、とても読書や原稿書きのゆとりはなかった。僅かに佐藤春夫の「田園の憂鬱」を、本当に憂鬱な気持ちで読むのが、せいぜいであった。まさにこれは病棟の憂鬱である。

この悪戦苦闘も、五日目の胃液検査で山を越した。夢にまで見た胃の中に入れるゴム管も、思ったよりうまくのみ込んだ。

「とても上手よ」

看護婦は、子供をあやすように私を励ましてゴム管を飲ませた。人によると一時間かかってでも飲み込めないそうである。しかし、このゴム管を二時間も飲み込んだならいるという事は、お世辞にも気持ちがいと言えるものではない。今日で一週間目。ようやく人間ドックの苦闘から解放された私は、苦難を乗り越えた快感と、「のどもと過ぎれば暑さを忘れる」人間の馬鹿さ加減にも似

て、「ああすんだ」と背延びした。

こんな時、私は私という人間をいろいろと考えてみた。日頃何かとバタバタしていると、自分を忘れ勝ちであるが、こうした所で一人でいて、闘っていると、自分というものがどれ程に至らぬものであり、修行の足りない人間であり、そして、一面甘いものであるかが分ってきた。人には偉そうなこと言い、学生を叱咤している自分は、一体何者なのだ。そんな後悔とも反省ともつかぬものが、ムラムラと湧いてきて、全くやり切れない淋しさを味わった。苦境と言えば大ゲサであるが、人間はこんな時、本当の自己がでてくるものに違いない。私の初めの期待が大きかっただけに、随分苦痛に感じた人間ドックの生活であった。しかし、今までの所、私が自覚している病状以外、これと言った病氣もなさそうで、来てよかったと自ら慰めた。或る日、浅草から知人のおばさんが見舞に来てくれた。私は毎日の苦しかったことを述べた。面白そうに聞いたおばさんは、

「それだけ修行したんだから、今後病院を出たら安居さんは大僧正になれるわ」

と大笑いした。ついつられて私も大笑いした。病棟の憂鬱は、この瞬間フツ飛んで行った。

《ハガキでひとこと》

学生 昔と今

三枝樹 正道

(京都家政短期大学長)

紙面の都合上、戦前戦後に分って、しかもその一面のみについて述べん。

戦前の学生は、教授を慕って志望の大学に集った者が少くなかった。そのために勉強に

余裕があり、研究に楽しみがあった。教室は勿論、研究室にも教授の家庭にも出入りして、指導と対話の場を求め、あらゆる機会を通じて教授に接触し、教授の人間的薫陶を受けたものである。このようにして、教授に対して極めて厚い信頼感と深い敬愛心とを以って、益々幸福な学生々活を送ったものであって、両者相互間は強い人格的紐帯によって結ばれていた。



然し戦後の学生は資格獲得がその主たる目的のようである。その結果は学問も研究も、極めて功利的打算的であるものが多い。従ってそれ自体味気ない生活である。教授との間にも人格的接触は望めず、教授も予定通りの授業をすすめることで責任を果たしたと考え、学生も資格取得に最少限度必要な学科目を履修して満足する有様である。

以上は極端な一例かもしれないが、当らずといえども遠からずの点があると思う。

前田 成孝

(東京都港区三田在住)

「天上天下唯我独尊」と釈尊はいわれたがこの言葉は世の中を渡って行く事については自分が一番大切であるという意味である。

我々が学生時代には一人々々が勉強するにも遊ぶにも、夫々の持味にて学生の本分を尽そうという心算があった。卒業すれば軍隊があつて社会共同生活を徹底的に植えこまれた。其後戦争になり、敗戦の憂目を見せられたが、学生も学徒出陣などで大半が死亡したのである。

現代の学生は戦後の荒廃の中に育ったせい、か、何の指針もなく右往左往して、学生としての方針が立っていないように見える。

今更軍隊が必要ではないが、全ての人々が共同生活できるような訓練ができていない。中には今の世の中は住みにくいから破壊して新しい世の中を作りたいという。けれど世の中は常住のものではない。新しい世ができればすぐまた古くなり、常に破壊しなければならぬことになる。

そのような事を勉強する機会もなく、教える先生もいないというような事であつたならば、学生は自ら群集心理に動かされるばかりではないか。中には指導的立場に立った信念のある学生もいるようだが、これが自分達学生の本分を乗越えてしまつてはならないと思

う。明るい学生らしさがほしいものである。

成田 光穂

(青森県八戸市在住)
(青森教区教区長)

長女が通っている小学校の六年生が近くの階上岳に登山するという。バスで登山口まで行き、帰りもそこからバスで帰る山登りだ。

昔はこんなものではなかった。

私も同じ小学校で同じ山に六年生るとき登ったものだが、その当時は小学校に朝五時頃集合、往復十里以上の道のりを歩く、夕方暗くなってから足を引きずるようにして帰校したものです。担任の先生はもう五十才位であったが元気に登られた。その時の遺物である黒ずんだ足の親ゆびの爪を切る毎に当時のことが思い起されます。

共闘学生に共感する

福井 豊信

(東京江戸川区江戸川在住)

三派やノンポリラジカルといわれる現代学生と話し合う機会を持った私は、彼等に共感

をおぼえ支援をおしまない。真理と自由を守る者は彼等であると感じるが故に。たしかに現実認識に欠ける点はある。然し、それは青年に特有のことであり、それ故にこそ純粋に考え行動できるのである。

自由を奪われた戦中中学生であった私のノスタリジアルかも知れない。然し、民青の鉄の組織にはファッショの恐怖を憶い出し、ノンポリ一般学生の世俗化(出世主義、レジャー謳歌)には同調できない。

現代学生には哲学も仏教も無縁のものとなっている。思想に触れるとすればマルクスだけである。この現実を我々は認識しなければならぬ。僧侶である私は何をしていたのかと自問する。そして、「親鸞に帰れ」を旗じるしにするという竜大の三派にはひそかに共鳴している。然し、日共の二段改革の手助けにはなるかと注告する。

仏教が生きていた時代は、常に現実への批判、改革の原動力であり得た。そのエネルギーは既に仏教になくなったのであろうか。

今、彼等と話し合うなかで、釈尊の教えられた「真理を求める生活」とは現代には、ど

のような生き方なのか、法然上人の衆生教化は現代にどのようなべきか、を求め、仏教のプロテスト運動はゲバを認めるかどうかは今彼等との論点である。

藤田 寛海

(埼玉県鴻巣市在住)

昨今の大学の紛争は一時ほどの激しさはないが、まだまだ鎮まりそうもない。自治や自主を主張する学生たちに接するとき、平均して彼等には自主性や自律性が極めて微弱のよう to 思われる。

このようなことに立ち至った原因はいろいろあろうが、初中等教育や家庭での過保護が大きな要因の一つと考えられる。

自治を主張する学生たちは、また、大学での教師との話し合いが少ないというが、今までの過保護の継続を期待して、教師たちから手のさしのべられるのを待っている。

「昔の学生」であった今の大人たちは親という立場から更に再考すべき点が多いようである。



ひとくち伝記(十一)

庶民の寺 定義如来

— 大江田博璘師 —

高橋良和

そろそろ秋風が身に浸むころになると、冬の日、東北の定義如来の西方寺に赴いたことを思い出す。

浄土宗の寺では、関東では吞竜さまの、太田市の大光院、それから東北のこの定義如来西方寺は庶民の寺として知られているのである。

仙台からバスに乗ると、一時間はかかると思うが、このころは、とても便利で駅前の仙台ホテルの前から、定義如来の門前まで、何回となくバスが往復している。

冬は雪深い閑村であるが、最近は大ムも出来て、道もよくなったので、なおさら庶民の信仰をあつめているようである。

土地の人は、「じょうげ」と発音しているのは、東北訛りのためなのだろう。

この寺は平定義が、壇の浦から仏像を背負って、この地に逃げ、遂に山深いこの村で亡くなるのであるが、そのとき、自分が死んだら、なんでもかなえてあげるから、自分のところに参るとよいという遺言を守って、墓の上に本堂をつくり、諸願成就の寺として、民衆とのつながりをもつようになるのである。

事実墓の上に六角の本堂が建てられて、定義公の墓は、床下にあって、囲を経だてておがむようになってい

る。

この定義如来の住職が大江田博璘僧正、東北、そして北海道の浄土宗連合会の会長として、合同の際に、側面から協力した功績は大きい。

当時は東北連合長であったが、大江田僧正は、浄土宗

の宗会のある度に、東京にやってきていた。

宗会の傍聴席に、風さいのあがらぬ、そしてひげを生やした田舎風の坊さんが坐っていた。

「なんとしても、浄土宗は合同してもらわにゃ、なんとか打つ手があるのならいつてくれ、わしで出来ることなら、なんとかするから。」

大江田僧正は、いつも熱心にこういつていた。

多少耳が遠い大江田僧正には、高橋秀道という秘書がいたが、この人も今は故人になっている。

大江田僧正が、上京したり、入洛したりするときは、いつも冬が多い。三月の宗会も、まだ東北では雪解けのころである。

というのは、三月ごろから十一月ごろまでは、連日の定義如来に、仙台の地域はもちろん、福島、岩手あたりから、毎日バスをつらねて参詣にやってくる団参でいっぱいである。

これらの団参は、この定義如来にやってくると、全部本堂に坐って、それぞれのねがいに応じて法要をしてもらうのである。

それも、この大江田僧正が出座して、つとめないと、参詣者がっかりするというのであるから、大江田僧正

にとっては、身体が二つあっても、三つあっても足りない。

本堂はそう大きくないから、二百人も坐ればぎっしりであるが、なるほど、定義公の墓の上の床に坐って、おつとめをうけるのであるから、これほどねがいをききとげてくださることはない。

本堂から下って、やすむ暇もない。御飯をいただく暇もないということである。

文字通り箸をとる時間もないくらいである。

そこですぐさま、腹にこたえるものかというと、お酒である。大江田僧正は、本堂から下って休む間にも、コップでぐいっと一ぱい口に入れる。

「僧正はなかなか酒が強いですね。」

とあるときたずねたら、

「御飯を食べる暇がないので、ついお酒ですますようになつて、強くなったのだよ。」

と、じょう談まじりに聞いたが、ひょっとするとそうかもしれない。

あの細い瘦躯鶴のような身体に、どうして酒があのように強いのかと、不思議に思うのだが、御飯などは一日一回ぐらい、ひょっとすると、口にしない日だってある

のかもしれぬ。

定義如来まで法要をしてもらうと、実に親切で、そのねがいの種類によって、一つ一つ、お札が異なっている。開運ならそのように、入学ならまたそのように、大漁なら大漁の祈願札と十数種類も異なったものを、信者にあたえるところに、この定義如来の行き届いた教化があるといえる。

そして木の札は、全部大江田僧正の直筆である。何百枚あろうと、何千枚あろうと、この僧正が、冬の雪のあいだ、全部自分自身で書きあげるというのである。

自業説法があるから、来山の信者たちに万足をあたえる。それだからまた参詣してくる。大江田僧正一代の教化が、定義如来を今日の盛大さにさせたのである。

僧正が亡くなって、二年になる。

東北の秋はもうすぎて、冬になっているだろう。定義如来の山門が雪をかぶる日ももう近いだろう。

へお詫びへ先月号にひとくち伝記(十)「刀ではだめこれだ」——林彦明師——の傍点の部分、玄明師となっておりしました。執筆者ならびに読者の方々に御迷惑おかけいたしました。お詫び旁々訂正させていただきます。

編集後記

◎秋も深まり、木々の色づいた葉も心なしか淋しげに散りゆく頃ですが、如何お過しでしょうか。巷ではこうした自然のたたずまいとは裏腹に、学生運動を頂点に騒然とした様相を呈しております。そこで今回のハガキ通信は先月号までの季節的な内容とは別に、会員の方々の御意見を寄せていただきました。各自の置れている立場で夫々の主張もあるでしょうが、和という立場から話し合いにたる解決の道はないものでしょうか。

◎けれども、過激学生は解決の道は力以外にないとしております。戦前の軍国主義から戦後の自由主義という過程を経験した現指導者。自由主義のもとで教育を受け育った学生たちの間との互いの不信感、これでは現時点での話し合いは不可能というより仕方ありません。

◎しかし、世の中はこうした学生をも含めて形成されていることは事実です。確かに解決の道を暴力に求めること、それは大いに非難されるべきでしょう。けれども彼等をそこまで追いつめた何かがあるはずです。私たちもただ傍観者というだけではなく、お互いに生活しているという点より、何等かの態度を示すべき時点に来ているのではないのでしょうか。

◇ 浄土トラクト ◇

浄土宗のおしえ (五版) 宮林昭彦著 価30. 円15

一枚起請文をめくって 村瀬秀雄著 価120. 円35

選択集私解 竹中信常著 価120. 円35

ものいう石 竹中信常著 価150. 円45

多数お申込みには割引いたします。施本にご利用下さい。

発行所 法然上人鑽仰会 TEL (262) 5944
振替東京 82187

〓御年始のご挨拶がわりに御用を、

「修養ひめくり」 価 100円・送料55円用紙33枚
タテ37cm・ヨコ13cm

会員のかたは単価85円 送料実費 (見本は 150 円お送り下さい)

『浄土宝暦』 価 30 円・送料 25 円 40 ページ

50 部 以上 より 単価 22 円 送料実費

東京都千代田区飯田橋 1—11—6

発行所 法然上人鑽仰会

電話 (03) 262—5944 番

「浄土」講読規定

一部 定価 六十円

会費一カ年 金七二〇円

(送料不要)

浄土 十一月号

昭和十年五月二日
第三種郵便物認可

昭和四十四年十月二十五日 印刷

昭和四十四年十一月一日 発行

定価 六十円

編集人 宮林昭彦

発行人 佐藤密雄

印刷人 関 二三男

印刷所 新光社印刷株式

会社

東京都千代田区飯田橋一ノ十一ノ六

発行所 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番

振替東京八二一八七番

東京都港区芝公園十九号地の一

浄土宗務支所内

編集室 法然上人鑽仰会

昭和十年五月八日 第三種郵便物認可 (毎月一回一日発行)
昭和四十四年十月二十五日印刷 昭和四十四年十一月一日発行

浄土

第三十五卷

第十一号

定価金六十円 (送料六円)